

日本サッカーの未来語る

スポーツ研究所シンポジウム

北澤氏、早川氏ら4人登壇



つづきの柱▽フィジカル▽技術▽組織▽育成——から日本サッカーを分析した。後藤氏は「今の日本選手のフィジカルは強くなっているが、日本人に合ったトレーニングが大切だ。外国人監督が就任した時に、これまでの組織がどう生かされるか。情報の蓄積こそが重要だ」と強調した。

李准教授は「個人のプレーがゴールに向かっていく姿勢になっているか。何のためにサッカーをやっているのかを理解することが大事である」と、自身の代表経験を振り返りながら話した。

北澤氏は「Jリーグ開幕のときから日本の育成力は優れている。若くして一流プレイヤーになる選手はハンタグリ精神がある。意欲を向上させる環境をつくるのが重要だ」と話した。

早川氏は「持久、高強度運動、スプリント(スピード)、筋パワーの4能力を強化するための対策を、育成時代から計画的に取り入れるべきだ」と説いた。

講演を聞いたサッカー部の葛谷将平さん(経済4)は「早川さんのお話から、データをよく見る重要性を教えられた。今まではシュート数や、自らのチームのボールポゼッションのデータに集中していたが、練習を効率よくこなしていくことが大事だ」と話した。

第2部ではサッカーの歴史や、元サッカー日本代表の北澤豪氏と早川氏の対談が行われた。ワールドカップ本戦4試合出場経験豊富な北澤氏の経験と、元日本代表監督の早川氏の指導法の違いを解説した。国内外それぞれ違う環境でプレーする選手のコンディショニングを整えることの難しさや、選手の体調やメン

スポーツ研究所(佐竹弘靖所長)の公開シンポジウム「日本サッカーはワールドカップで何を学び、何を継承していくのか」が11月14日、生田キャンパスで行われ、サッカーの元日本代表選手、日本代表チームを支えたコーチや識者が、日本チームの強化策を語った。学生ら延べ700人が参加した。(株バスクリン協力)

第1部の基調講演で、タルを可視化することの重要性を挙げ、さらには最新の技術を応用したデータ戦略が勝敗に関係すると語った。

その後、元NHKエグゼクティブアナウンサーの山本浩氏の司会進行で、元サッカー日本代表の北澤豪氏と早川氏の対談が行われた。ワールドカップ本戦4試合出場経験豊富な北澤氏の経験と、元日本代表監督の早川氏の指導法の違いを解説した。国内外それぞれ違う環境でプレーする選手のコンディショニングを整えることの難しさや、選手の体調やメン

公共政策フォーラム2018 商・石川ゼミが3位



表彰状を手に笑顔の戸野さん、富山さん、平方さんと石川教授(左から)

自治体が抱える課題に案する「公共政策フォーラム2018」が11月24、25の両日、愛知県新城市で開催され、商学部3人が3位に当る新城市で表彰された。

企業研修報告会を開催

ネットワーク情報学部企業研修報告会が10月16日、生田キャンパスで開催された。

企業研修は、履歴書作成、マナー研修など全10回の事前授業を受けた後、夏期休暇中に2週間のインターンシップを行うキャリア科目。学生に実社会で働く機会と自分の進路を考えるきっかけを提供する。(担当教員・飯塚佳代教授、小林隆教授)

今年1T関連などの企業で3年次生24人が研修。代表して4人(太田成美さん、前嶋彩さん、松室侑花さん、廣澤響樹さん)が成果を発表した。1、3年次生約450人、教職員のほか受け入れの企業関係者も出席して発表を聞いた。



多くの学生が出席し発表を聞いた

市議会賞を受賞した。同フォーラムは日本公共政策学会の主催。今年「若者活躍社会の拡大」をテーマに学生政策コンペが行われ、全国13大学16チームが参加。初日の予選を経て25日に6チームによる決勝コンペが開催された。

石川ゼミのメンバーは富山凌さん、戸野恵佑さん、平方太郎さん。「マイルドヤンキーが活躍するまちづくり」を提案した。

マイルドヤンキーとは地元志向が強く仲間や家族とつながりたいという思いを込めた。見つけてほしい」とコメントを寄せた。

富山さんは茨城、戸野さんは鳥取、平方さんは群馬といずれも地方出身。アイデアをまとめるにあたっては、地元で働く友人ら100人からアンケートを取り、二つの市役所で話を聞いた。そこで若者が現状に満足し

族など横のつながりを大事にする若者を指す。石川ゼミチームは「人口減少が進む中で、地元を愛し地元で生きているマイルドヤンキーは地域の宝」として、チームを組んで消防団への加入や祭りの主催、農業やごみ拾いボランティアなどに参加、さらにSNSで発信することで地域活性化につなげると提案した。

富山さんは茨城、戸野さんは鳥取、平方さんは群馬といずれも地方出身。アイデアをまとめるにあたっては、地元で働く友人ら100人からアンケートを取り、二つの市役所で話を聞いた。そこで若者が現状に満足し

人文・ジャーナリズム学科 就業体験の成果を発表

文学部人文・ジャーナリズム学科のインターンシップ成果発表会が11月17日、生田キャンパスで行われた。今夏、新聞社や出版社、図書館などで就業体験した3年次生14人が報告した。

森田ひかりさんは海老名市立図書館で1週間の就業体験を行った。同図書館は、レンタル大手「TSUTAYA」を傘下に持つカルチュア・コンビニエンス・クラブ(CCC)が指定管理者となっている。カフェや書店を併設し、イベントなども多く開催。森田さんは配架やレファレンス(調査業務)のほか、子

ども向けの選書や読み聞かせなどにも携わった。もともと図書館にはあまり興味はなかったが「自分の知らない世界を見てみたい」と参加した。

森田さん。業務を通じてさまざまなジャンルの本に触れ「面白い本はたくさんある。まずは本を手にするのが大事」との思いを強くした。

痛感したのはコミュニケーションの大切さ。レファレンスサービスでは、利用者が何を求めているのか丁寧に聞き取り、相手の立場に立って考えたり、サービスを提示したりした。それは今後、どの仕事に就いても重要なことだと気がついた。

朝日新聞社のインターンシップに参加した山口真由さんは三重県津総局などで取材や原稿執筆を体験。「質問する力や、だれにでも分かりやすい文章を書く力を養うことが大事だと学んだ」と報告した。

同学科のインターンシップは、夏期休暇中の1〜2週間、メディア系企業や機関で実務を体験することで、これまでの学習内容を一層深めることを狙いとしている。前期には心構えやビジネスマナーなど事前指導があった。



体験を発表する森田さん